

ご意見ご連絡は下記へどうぞ

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭 e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

事務局長 Peter Nicholsピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association

Website は「北海道野生動物研究所」と入力して下さい

<2012年度時点の北海道の熊の生息数が、

「10,600頭(誤差±6,700頭)」という道庁の発表数値について>

本号の裏面に、それに関する朝日新聞の記事を掲載しています。その記事に依ると、

① 1990年～2012年までの間に、蓄積したデータに基づき、「科学的に分析」し、算

出した生息数数値だと言う。10,600頭と言う数値もさる事ながら、

(誤差±6,700頭)が、くせものである。なぜかと言えば、

②生息数「10,600頭(誤差±6,700頭)」とは、書き換えると、

最少頭数が $10,600\text{頭} - 6,700\text{頭} = 3,900\text{頭}$ で、

最多頭数が $10,600\text{頭} + 6,700\text{頭} = 17,300\text{頭}$ と言う事で、

最少と最多で、13,400頭もの差があると言うことである。

結論を言えば、2012年度時点の、北海道での熊の生息数は、3,900頭から、17,300頭の間であった、と言う事だが、皆さんは、この数値を、どう考えますか。

私は公的機関が、このような数値を、よくも恥ずかしくなく、公表したものだと思う。要するに、この数値を見る限り、北海道に熊は生息しているが、その生息数は分からないと言う事が、分かった、と言う程度の事ではないのかと、私は言いたい。

私は、人的経済的被害が予防し得れば 北海道に熊が幾ら生息していても、良いと言う立場である。被害は皆無には出来ないが、限りなく、少なくはし得る。それには、①熊が居そうな所に行く場合は、笛と鉦を持参し、熊に自分が見つけられる前に、先に熊

の存在に気づくような歩き方をする事。 ② 経済的被害は柵の適切な用い方(恒久的

的に張る場合と、一時的に張る場合とを見極める)で防ぎ得る。よって、熊の実

像を理解し、熊を殺す事を考える前に、この大地は万物の共有地との観点で、人

は熊との共存を目指すべきであると、啓発したい。

ヒグマ 推定1万600頭

道は2012年度のヒグマの生息数を推定1万600頭(誤差±6700頭)と発表した。春グマ駆除を禁止した1990年以降に蓄積したデータを初めて科学的に分析し、狩猟者への聞き取りによる12年度の推定数より2倍以上多いことがわかった。道は今後、地域単位で捕獲数の上限を決めて管理することを検討する。



冬眠から目覚めた知床のヒグマ
マ12013年4月、斜里町

聞き取り調査の倍以上 12年度

道、初の科学的な生息分析

道は90年度以降の雌雄別捕獲数や、出産数と間隔、生存率、生息密度、痕跡発見率などの科学的データを解析し、毎年の推定生息数を算出した。90年度は5800頭だったが、12年度は1.8倍の1万600頭に増えた。

道内は六つの地域個体群に分かれており、推定生息数は多い順に道東・宗谷4200頭(90年度の1.8倍)、日高山系2800頭(同1.9倍)、渡島半島1400頭(同1.3倍)、天塩・増毛1千頭(同3.3倍)、積丹・恵庭800頭(同2.7倍)、夕張山地500頭(同1.7倍)と、全地域で増加している。

道はこれまで、狩猟者への聞き取りなどから推定生

息数を90年度は1800、3600頭(中間値2700頭)、12年度は2200、6500頭(同4350頭)としていた。今回の科学的分析で、狩猟者の印象に基づき推定生息数が過少だったことがわかった半面、「増加傾向」という点はおおむね一致していた。

ヒグマによる農業被害も90年度の6900万円から増え、14年度には1億2800万円になった。ただ、ヒグマは農作物やごみの味を覚えると頻繁に畑や民家近くに出没する傾向があることから、生息数の増加よりも、問題行動をとるヒグマが増えた影響が大きいと指摘されている。

科学的な推定生息数を算

出できるようになったことで、道は17年度以降の次期「道ヒグマ保護管理計画」で、現在渡島半島だけで実施されている「総捕獲数管理」の手法を他地域にも導入することを目指す。エゾシカのように捕獲目標を設定する個体数管理ではなく、捕獲数の上限を決めて

ヒグマとの共存を進める考えだ。

さらにヒグマ対策に必要な技能者を育成するため、春の積雪期に足跡などを追跡して捕獲する事業(親子連れやメスを除く)も、渡島半島から他地域に広げることを検討している。

(奈良山雅俊)